

SK185 262は甌 Aa 2 のバリアント。口縁部内面の刻みは指で圧痕状に施されている。体部外面は二枚貝調整であるが、わずかに一次調整のハケメが観察できる。

263は二枚貝調整の後研磨を施した細頸甌の底部。成形は a。黒色仕上げ。折衷型。

264は太頸甌 A。黒色仕上げ。頸部の柳描直線紋は口縁部近くまで達している。265は細頸甌 Aa。口唇部に刻み。屈曲部の刻みは二枚貝。棒状浮紋上にはハケメ工具による圧痕が施される。

266は柳描紋 a 類と d 類の複合した例として珍しい。1・3・4は複帯柳描紋のなかに扇形紋 2段と継位弧線および円形浮紋が施されている。2は円形浮紋の両側に継位弧線(2・2の柳川様)と沈線が観察できる。5は複帯柳描紋のなかに扇形紋が一つと沈線 6本が観察できる。

266のような例は少ないが、これを見るかぎりでは継位弧線と扇形紋の使われ方の異なることが分かる。つまり、後者は流水紋としての構成に関わるが、前者は分割線的な使われ方をしているのである。そして、このような柳描紋と沈線の併用によって柳描直線紋が分割される手法は、B 系統にも深く関係する手法であると指摘できる。これはB 系統からの影響を示すのではなく、逆にB 系統への影響を示すものである。また柳描紋 d 類の由来も示しており、柳描紋 a 類段階の紋様全体の完明が極めて重要であることを痛感させる。

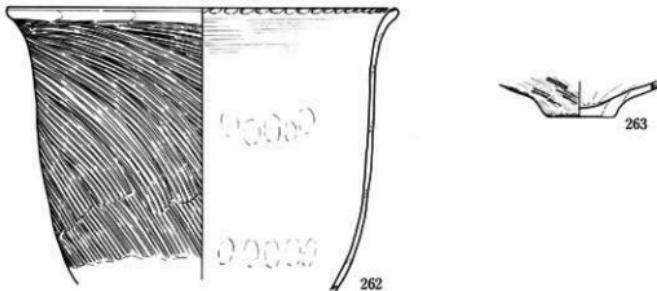
267は柳描紋 d 類。

268はCa系系統甌の複合鋸歯紋。

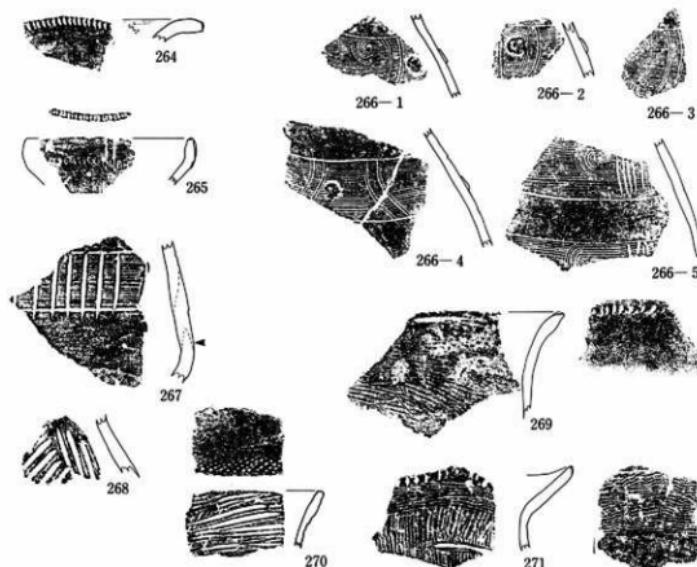
269は甌 Aa 2。

270は深鉢 Cb。口縁部内面の櫛刺突紋は細かいが押し引き状をなしている。

271は今回唯1点出土した近江形甌の典型ともされた波状口縁甌である。口唇部にはハケメ工具による刻み、口縁部内面にはハケメ工具による波状紋が3帯施されている。恐らく体部上半にもハケメ工具による施紋がある。工具のアタリかと思われる条線が観察できる。有段波状口縁甌とは大きくは同系統であるが、分布的にずれるので、下位区分で分類する必要がある。



第74図 SK185出土土器 (1)



第75図 SK185出土土器 (2)

S K 193 272は小形壺。調整と同じハケメ工具による施紋が特徴的である。系統不明だが、施紋手法的にはD系統に近いグループか。

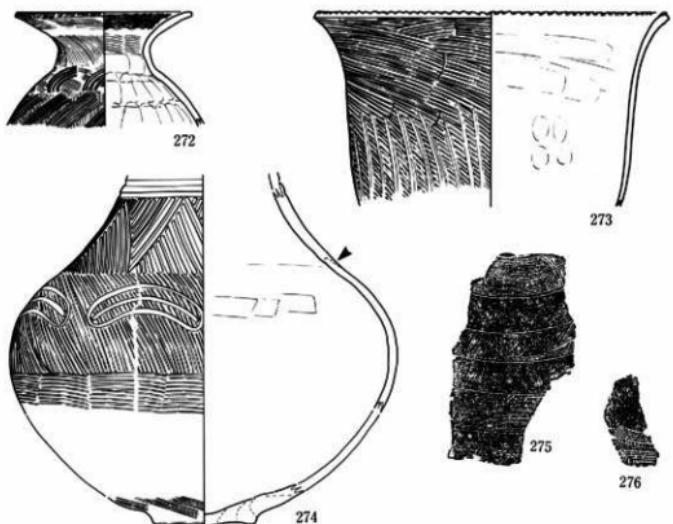
273は壺 Aa 2。口唇部上端は二枚貝による刻み。体部下半には最下部の研磨部分(この部分は欠損)から上方に伸びた研磨がまばらになって観察される。

274は太頸壺Ca。体部上半の連環状弧紋には中に沈線が1条加えられている。底部は中央が少し突出する。成形 b か。

275は櫛描紋 b 類、276は櫛描紋 a 類。

277は大形の深鉢 Cb。基本的には横羽状条痕であるが、口縁部左の方には部分的に縱位の羽状条痕となっている部分がある。278も深鉢 Cb だが、こちらは完全に縱位羽状条痕が施されている。

279は筒状(角杯状)土製品。紋様は沈線紋で精製鉢などの紋様手法に共通する。黒色仕上げ。



第76図 SK193出土土器

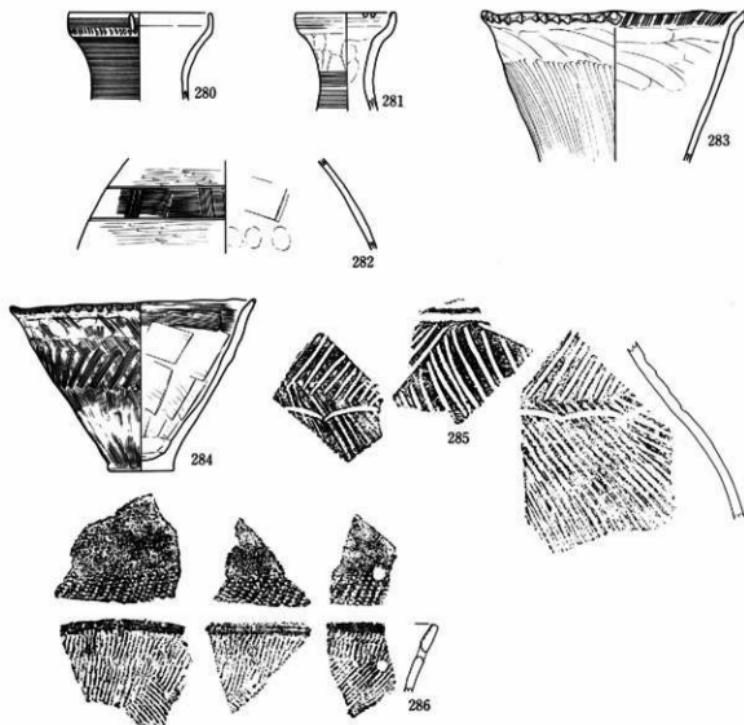
SK212 280は細頸壺 Aa。口縁部屈曲部のD字刻みは→方向に施される。281も細頸壺 Aa だが、口縁部内面に2ヶ一対の部分圧痕が施されている。頸部直線紋は櫛 I種 A類。

282は櫛描紋 a類。原体は櫛 I種 A類。施紋は非常に細密で浅い。

283は口縁部内面に櫛齒状の紋様を施し、口唇部には板による刻みと円周の何分割かの位置にある大きな圧痕が施される。体部内面や外面の上半はナデで下半のみ研磨であるが、一応精製の部類に含めてよいであろう。284は鉢 A。体部上半にはハケメ工具による整った斜位の調整があり、一見紋様的である。

285はCa系統壺。複合鋸齒紋直下に連弧紋が施されているので、体部上半にはとくに紋様は施されないのである。

286は深鉢 Cb。深鉢 Cb の多くは口縁部直下に横条痕を施すけれども、本例にはない。また右端のように穿孔を加えて補修しているのも珍しい。口縁部の外反が極めて弱くかな



第77図 SK212出土土器

り直線的な体部上半のようであり、典型的な深鉢の形態を保持している。口縁部内面の櫛刺突紋はやや押し引き状を呈する。

- S K228 287は細頸壺 Aa。口唇部は平坦面をなす。口縁部波状紋は上に尖る。頸部には簾状紋がある。体部櫛描紋は付加沈線ではなく、櫛描直線紋上には扇形紋が施されている。
 290は太頸壺 B。289は壺 Ac。288は壺 Ad。口唇部の刻みは壺 Aa の影響。
 291は口唇部にハケメ工具による斜格子状の刻みが施される。292は無頸壺。
 293は精製鉢。やや深めの形態になるかもしれない。紋様は沈線からなり、口唇部と屈曲部に二枚貝による刻みが施される。黒色仕上げ。
 294は口唇部の上下端にハケメ工具の刻みをもつ、壺 D。295は壺 Aa 1。
 296はCb系統（柳条系）の壺頸部。口縁部内面は沈線。297はB系統壺の頸部。



第78図 SK228出土土器

S K 280 298は甕 Ac のバリエントか。口縁部内面は二枚貝腹縁の押し引き紋(→方向)。深鉢 Cb 内面紋との関係があるかもしれない。

S K 295 299はCb系統(櫛条直系)受口状口縁壺。突帯の刻みは指頭による。

300は細頸壺 Aa。残念ながら紋様はわからないけれども、体部上下界を突帯ではなく破を形成して刻む手法は古い様相である。

S K 297 301は太頸壺 A。口唇部には刻みではなく刺突紋が施されている。

302は、細頸壺 Aa の形態・施紋そのままであるが、体部下半の調整が放射状ハケメではなくB系統に普通みられるクモの巣状ハケメであり、かぎりなくA系統に接近した折衷型である。

303は口縁部が強いヨコナデでやや垂下する。瘤状突起は円周4分割の位置にある。頸部は櫛描直線紋を施した後に沈線が施されて、いわゆる籠櫛併用紋となっている。304は口縁部内面に三角形刺突紋と4分割円周の位置に瘤状突起、頸部には板?

のエッジで羽状紋が施されている。

303・304はD系統に属すか。いずれにしてもA系統ではない。

305はB系統壺の体部下半。

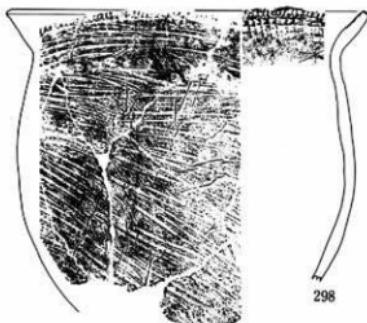
306は深鉢Cb。底部には織布痕がある。

307は櫛描紋 a 頸。黒色仕上げ。

308・309は甕 Ad。310・311は甕 Aa 1。311は二枚貝調整痕の間からハケメが観察できる。

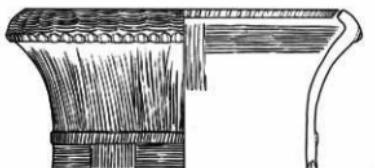
312はB系統のバリエント。体部の研磨などにA系統との関係があるかもしれない。

313・314は深鉢 Cb。313の口縁部内面は櫛の押し引き状刺突。314は二枚貝刺突で、体部外面は縦位羽状条痕のようだ。口縁部直下の横方向の条痕がない。

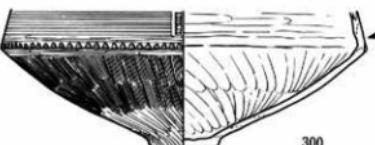


298

第79図 SK280出土土器



299



300

第80図 SK295出土土器

SK314 NR02の埋土上部に堆積していた白色シルト層を切り込む土坑である。

315は甕 Ab。口唇部上端はハケメ工具で刻む。口唇部にはハケメが施されている。

316は深鉢 Cb。口縁部内面の櫛突紋は押し引き状になってはいない。

S D04 (図版27～図版33) この溝からの出土土器は、すべて一時期というわけではないけれども、量が確保できるので全体的な議論ができるという利点はある。出土土器の一部は『年報 I』(1983)で「SDI7」として紹介し、その当時から細分は別としてⅠ期の基準になる資料であると考えていた。その後の資料集積も十分とはいえないが一応満足のいくものであった。

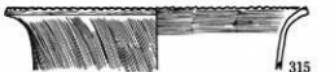
この溝から出土した土器は、器種ごとの出土量に偏りはあるものの各系統を含んでいるので、以下系統ごとに説明する。

A系統

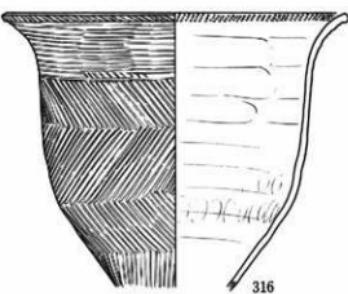
壺には太頸壺・細頸壺・無頸壺があり、比率的には細頸壺がほとんどを占める。太頸壺は、頸部に沈線紋を多条に施し下部にX状刻み突帯をめぐらす例(481)、無紋(482)、484のようなハケメを横羽状に施すものがある。体部施紋では、458は付加沈線磨消手法で繩紋を採用しているが、頸部刻み突帯の下には櫛描直線紋を施した後に二枚貝刺突紋を加えている。482は櫛II種 b類を原体に、一部波状紋帯を加える珍しい紋様構成を取っている。口縁部は504・505のように口唇部の上下端をべつに刻むもの、507・508のように1ヶ所のみ刻むものがある。これは壺の大きさにも関係するようである。506は口縁部内面に二枚貝刺突紋を施す例である。544は口縁部外側の直線紋が二枚貝で施され、口縁部内面にも二枚貝による押し引き紋が加えられている。細頸壺はAaがほとんどである。紋様は、櫛描紋の他に繩紋が若干ある(455)。体部紋様は櫛描紋と類がほとんどで、ついでa類(509・510・512)、c類(416・441・520・522)となる。櫛描直線紋を断続的に施す485のような例もある。体部紋様最下段には516のように精製鉢など精製土器紋様と同じ沈線の網格子紋を施すものがある。口縁部は、433～438のようにいろいろある。433は屈曲部のD字刻みが横に流れで押し引き状をなす。434・437は口縁部内面に部分圧痕が施される。435は屈曲部の刻みに加えて頸部にも刺突紋が施される。焼成は黒色仕上げがほとんどである。

無頸壺は486・499とも細頸壺成形第2段階である。

甕はAdが多く、Aa2はそれほど多くない。Aa1は皆無である。しかし、Adが多い



315



316

第82図 SK314出土土器

といつても、法量や外觀などによる類型化は難しい。

有孔土器は幾つかある（430・478・479）が、いずれも甕底部の焼成後穿孔である。

鉢は、456が円筒状の脚台に大きな円孔を穿つ特殊な形態である。493は口縁部に甕 Ab と同じ刻みを施す。

高杯は421が杯内部上面に刻み突帯をめぐらす。457は器台状の環状土製品。

B系統 甕がほとんど（453・524～532）で、甕は皆無。495は、頭部外面の紋様にB系統らしさがあるだけで、口唇部・口縁部内面の紋様は

A系統の強い影響がある。折衷型である。

C系統 甕は494が形態のわかる唯一の例で、他は

破片ばかりである。420は頭部外面に直線紋とはいえない条痕を施している。454・496・535は二枚貝刺突紋系で、535は体部中位の重連弧紋である。533はCa系統に特徴的な口縁部。539・540は繩紋带上に1条沈線を附加している。536は二枚貝刺突を観察できるが、沈線で重方形紋を描く大地形甕のグループに属す。

537は黒色研磨甕の体部上半の張る部分（肩部）で瘤状突起が施されている。419は大地形甕の典型。口縁部内面は第83図のようになっていい。沈線6条（平行沈線3単位か？）が内と外に交互に開放する（矢印部分）が、外向矢印部分はちょうど突起部分に相当する。

深鉢は、櫛条痕系（431・480・写真図版15-d）と二枚貝条痕系（465）がある。図示してはいないが。口径約50cmの大形品が1点ある。dには底部にモミ压痕と布目痕がある。

D系統 甕には、424のような口縁部の外反が強く体部との境界が明瞭なもの、体部上半にハケメ工具による直線紋（ヨコハケメ）を施す例（466・494）の他に、有段波状口縁甕と呼んだ497・545・546がある。546の口縁部内面にはハケメ工具による波状紋が施されている。

甕は、確定できない。可能性のあるのは、500～503、543などである。500は口縁部内面に瘤状突起を貼り付けるだけでなく、口縁部を強くヨコナデしている。口唇部の刻みは面に対して直交に施されており、口唇部の上下端に別に刻みを施すA系統とは手法が異なる。

543は、頭部に多条沈線紋が施され、下部には刻み突帯2条と棒状浮紋が3本1対で何ヶ所かに加えられる。体部は磨消帶と沈線斜格子紋帶が交互に施される。頭部の多条沈線紋はもともとD系統の紋様要素と考えたほうがよいのかもしれない。



第83図 419口縁部内面拓図
(反転合成したもの 1:4)

S D 12 (図版34・35) 547は二枚貝刺突重連弧紋をもつCa系統壺。体部下部には粗いハケメ状の条痕が施される。508はII期壺の混入。口縁部内面にはまだ研磨が施されている。

549は櫛描紋d類。縦位の直線と弧線が単位を構成している。

550はCa系統の細長頸壺。複合鋸歯紋は沈線を挟んで2段に分かれる。

551~553は甕D。いずれも、口唇部の下方への拡張が目立つ。

556は付加沈線を持たない櫛描紋a類。櫛II種b類の復帶に、2・2の櫛III種で縦位直線と弧線を加える。いちおう黒色仕上げ。

557は条痕紋系の櫛描紋。Cb系統壺か。558は二枚貝刺突紋系の無頸壺。A系統か。

559は櫛描紋b類だろう。2枚刺み突帯直上の斜格子紋は沈線。黒色仕上げ。

560はC系統壺の体部中位。鋭い切り込み状の沈線による複合鋸歯紋。

561は縞紋。棒状浮紋上にも縞紋原体による圧痕。

562は櫛II種b類を原体とする櫛描紋。紋様構成上は付加沈線の代わりに刺突紋が施されている。黒色仕上げ。563は大頸壺A。口縁部近くまで櫛描直線紋が及んでいる。

564はCa系統受口状口縁壺。口唇部と屈曲部突帯に二枚貝押し引き紋。口縁部外面には櫛?条痕の上に羽状沈線紋が施される。

565は体部中央の二枚貝刺み突帯3条。566は頸部外面に細密な条痕を施す壺。C系統に属すか。

567は外面に二枚貝直線紋を施す太頸壺A。口唇部にも二枚貝刺み。

568は甕Ad。口縁部上端の刻みは甕Aa系列の影響。

569~572は深鉢Cb。口縁部内面の刺突はいずれも押し引き状を呈する。571は刺突が羽状に施されている。古い様相である。

N R 02 (図版36~図版38) この遺構は自然力によって形成されたものである。出土土器は、この遺構 자체に伴うといよりは、削った遺構・包含層からの二次的な混入であると考えたほうがよい。それでも取り上げるのは、今回の調査では希少なI-1a期A系統の資料を含むからである。

I-1a期 壺は598・599・600。すべて黒色仕上げ。甕は579・580・581である。他の系統では、604(深鉢Ca) 口唇部に押し引き状の条痕を施している。

I-1b期 上記以外。593は大頸壺A。口縁部内面にハケメ工具圧痕の施された棒状浮紋が貼り付けられている。頸部以下は櫛I種a類の細密な櫛描直線紋が施される。付加沈線はない。

575は瘤状突起をもつ壺576・577は細頸壺Aa。578は細頸壺成形第2段階。口縁部の波状紋は復帶。縦位弧線は3・3・3の櫛III種。底部の突出が強く古い様相を示す。

582~590は各種甕。585は体部上半3分の2ほどしか二枚貝調整されないが、590は底部近くから二枚貝調整が始まる。

591は内外面とも研磨された鉢。スス付着。

592・593は高杯。593は外面が粗いハケメ調整。脚柱状部を中心にして裾部に(上面から見て)十字方向に沈線が施される。

594は外面に丁寧な研磨を施した鉢。

595・597は甕 D。

596は深鉢 Cb。

601は波状紋の複帯と付加沈線。金雲母を多量に含みキラキラしている。D系統に含めることができる。

602は二枚貝刺突重連弧紋。黒色仕上げ。

603はC系統だが体部条痕は二枚貝ではなく櫛。体部上半に連環状弧紋。

605は深鉢 Ca。

606・607はB系統。606は本遺跡では珍しい直口壺。607は甕。体部外面の調整は櫛II種b類による右上がりに施される。口縁部内面に櫛描紋はないので、単独圧痕を円周4分割の位置に施すと考えられる。

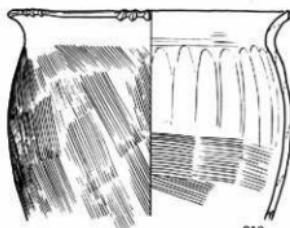
S K 61 I - 2期のまとめた一群である。324は口唇部に二枚貝刺突。頸部には2条の沈線。325は無紋の壺。口縁部の外反が強い。326・327は細頸壺 Aa. 331は口縁部に指ツマミが施されII期に盛行する指頭圧痕紋につながる特徴をもつ。332は甕 Ab. 333・334は甕 Ad. 335は甕 D. 小形で体部の張りも強い。336は粗製の鉢。328は恐らくCa系統壺の末期的形態。沈線が3条で1単位をなしているのと、頸体部界の成形上の段が名残をとどめる。329は体部の二枚貝条痕が雜で、一次調整のハケメが下に見える。

S D 10 317はCa系統の受口状口縁壺。口縁部に複合鋸歯紋を施す。



317

S K 45 323は甕 D. 口縁部内面にハケメ工具による波状紋が2帯施される。口唇部には上下端にハケメ工具による刻み、と大きな圧痕が施される。



318

S K 69 339は口縁部内面にハケメ圧痕を施す。

S K 75 340は←方向の断続櫛描紋。

S K 94 342・343はB系統壺の新しい様相を示す。

S K 174 346は甕 D。

S K 183 349は無紋の太頸壺 A。

S K 186 353は太頸壺 Ca. 口縁部は微妙に受口状をなす。体部上半には連弧紋の代わりに山形紋が施される。

第84図 SD10出土土器

S K 188 358は混入。

S K 210 363・365は甕 D. 364はハケメの上に擦痕がある。

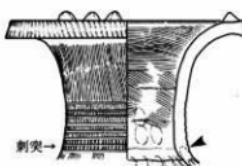
S K 230 366は太頸壺 Ca. 頸部紋様は、下向きのコ字重ね。他はCa系統通有の調整・施紋。

S K 233 368は混入。II - 2a期の磨消線紋系壺。

369は口縁部の垂下する最内第II様式壺と共通する形態。口縁部内面にはハケメ工具圧痕のある棒状浮紋が3本1対で円周4分割の位置に施される。黒色仕上げ。形態的にはI -

1a期に含めたい。

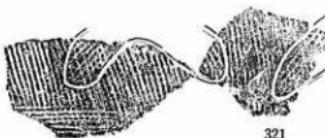
- S K 239 370は壺 Aa 2。体部には縦位に何分割かする直線が施される。口縁部外面の指オサエ痕は非常に顯著。
- S K 258 379は壺 Aa 1。
- S K 271 381はCa系統か。
- S K 272 382は細頸壺 Aa の口縁部を倒立させて脚部とした高杯。
- S K 283 383は太頸壺 B の典型。
- S K 338 384は大きな円孔を円筒形の脚部にもつ高杯。脚部の裾は突帯状に突出しハケメ工具による刻みが施される。
- S K 124 390はCa系統壺の新しい部分か。ハケメ調整を残したまま施紋されている。斜格子紋・連弧紋の下にはいちおう条痕が施されている。391は深鉢 Cb の模倣か。
- S K 199 394は深い形態の精製鉢。黒色仕上げ。
- S K 220 401は壺 D。口唇部には斜格子状の刻み。口縁部内面にはハケメ工具の波状紋。
- S K 230 404は繩紋壺。406は太頸壺 C の口縁部。珍しく外面にハネアゲ紋が施される。407は壺 B。口縁部内面には櫛描紋が施される。体部外面は櫛 I種 A類の右上がり調整。
- S K 240 408は二枚貝刺連弧紋。重連弧紋かもしれない。
- S K 275 415は小形のCa系統壺。複合鋸齒紋と連弧紋は必ず施される。
- 609・610は有段波状口縁壺。610は口唇部にも刻みが施される。
- 611・612は壺 B。
- 包含層 613・614・620・621はおそらく I - 1a 期に属す。620はB系統の中で盛行する大形鉢の祖形である。体部上半は二枚貝直線紋、中位は研磨、下半は二枚貝条痕だが、地にはハケメが見える。613は外面に棒状浮紋が縦位と横に弧状に貼り付けられている。浮紋上には二枚貝背面圧痕がある。口唇部は二枚貝腹縁の押し引きだが、浮紋のあるところには二枚貝背面圧痕が施される。内面は横方向の条痕とそれに直交させて半載管状工具によって直線が引かれる。621は口唇部に条痕と円周 5 分割の位置に指頭圧痕が施される。
- 618は太頸壺 Ca。体部には連弧紋ではなく二枚貝腹縁の波状紋が施される。
- 627は頸部に多条沈線を施す細頸壺である。D系統か。
- 632-636は壺 D とその折衷型である。633は底部が厚手で成形は a なので、A系統に属す。
- 635は有段波状口縁壺。636は体部にハケメ工具で直線紋と波状紋を施す。口唇部は垂下している。
- 319は口縁部内面に瘤状突起を施す壺 D。口唇部はハケメ工具の浅い圧痕が施される。頸部の多条沈線下部には刺突が施されている。
- 320・321はどちらもCa系統の紋様である。
- 320はX状に二枚貝条痕が施された後まわり



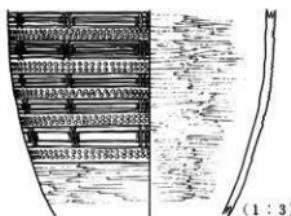
第85回 コブ付太頸壺 (D系統)

を沈線で囲む。

322は遺跡で採集した精製鉢である。横型流水紋を櫛刺突紋で区切る大地形畫の典型的な紋様構成を示す。紋様部以外は内外面とも研磨を施す。



第86図 緩条痕紋系土器



第87図 Ca系統？精製鉢

石器

珍しいものとして次の2点がある。

1は唯一磨製縦摘具の可能性のある石器片である。

2は打製大形尖頭器である。サヌカイト製。

石鎌 有茎五角形系は7割以上で主体を占める。無茎にも五角形はあるが、比較できるほどの点数はない。三角形様は1点ある—3。無茎は他に1点ある。有茎五角形には、側縁の形状から、

a類：先端から緩やかなカーブを描いて明確な五角形をなさないもの—4

b類：側縁がほぼ直線的な五角形をなすもの—6・10

c類：側縁が内凹するもの—11—18（他に1点ある）

に区分できる。

そして、c類には五角形の上部二角の上下で強く内彎させて角を強く突出させるもの—12・13・14・17・19がある。また側縁の剥離を鋸曲状にする例—13・19がある。

茎部は、五角形鎌の場合、下部に表裏両面から「ハ」字に大きな剥離を施すことによって作り出すのが普通である。その点で5の茎部に細かい剥離の集中することは、これが茎部作出手法において別のグループに属することを示している。

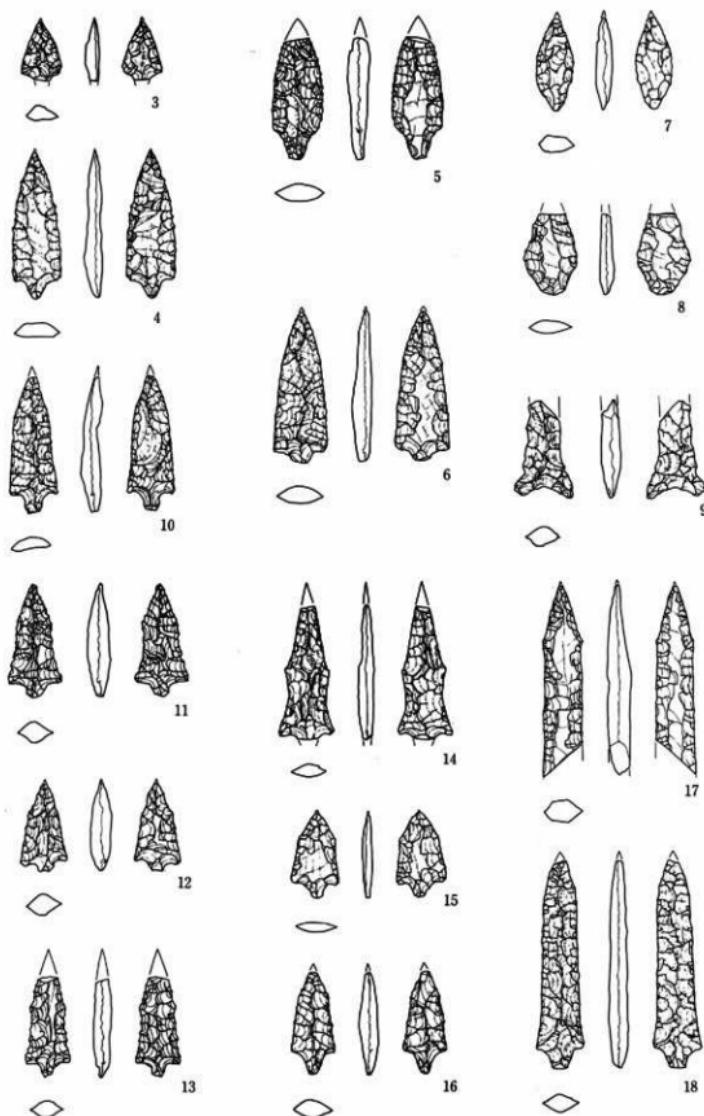
石鎌の大きさでは、五角形鎌のなかでバラツキがある。3cm未満の15から6cm以上の18まである。こうした大きさの違いは当然重量の違いとなるのであり、対象の違いにも関わるものと推測する。

石錐 21—24は石鎌の転用でおそらく回転運動の効率を重視した機械的な穿孔に使用されたものであり、穿孔対象には有孔土器の底部孔や磨製縦摘具の紐孔など硬質の材を対象としたのであろう。25—27は指で摘んで使用する通有の石錐である。

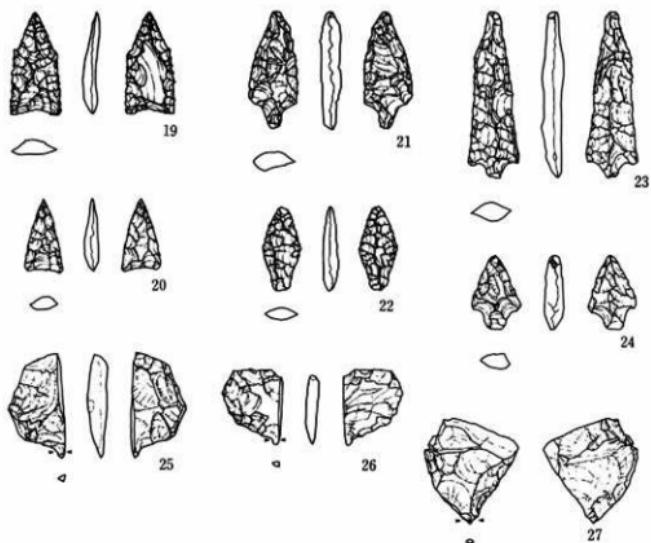
磨製石斧 加工斧・伐採斧がある。加工斧は幅2.5cm、長さ3.5cm前後の一群と長さ6cm程度で幅が2.5cmと5cm弱のものとがある。こうした長さや幅にみられるある程度の規格性は、装着すべき柄の大きさにも規定されているのであろう。伐採斧は多くが折損しており、完全なものは少ない。



第88図 石器 (1) (1 : 2)



第89図 石器 (2) (2 : 3)



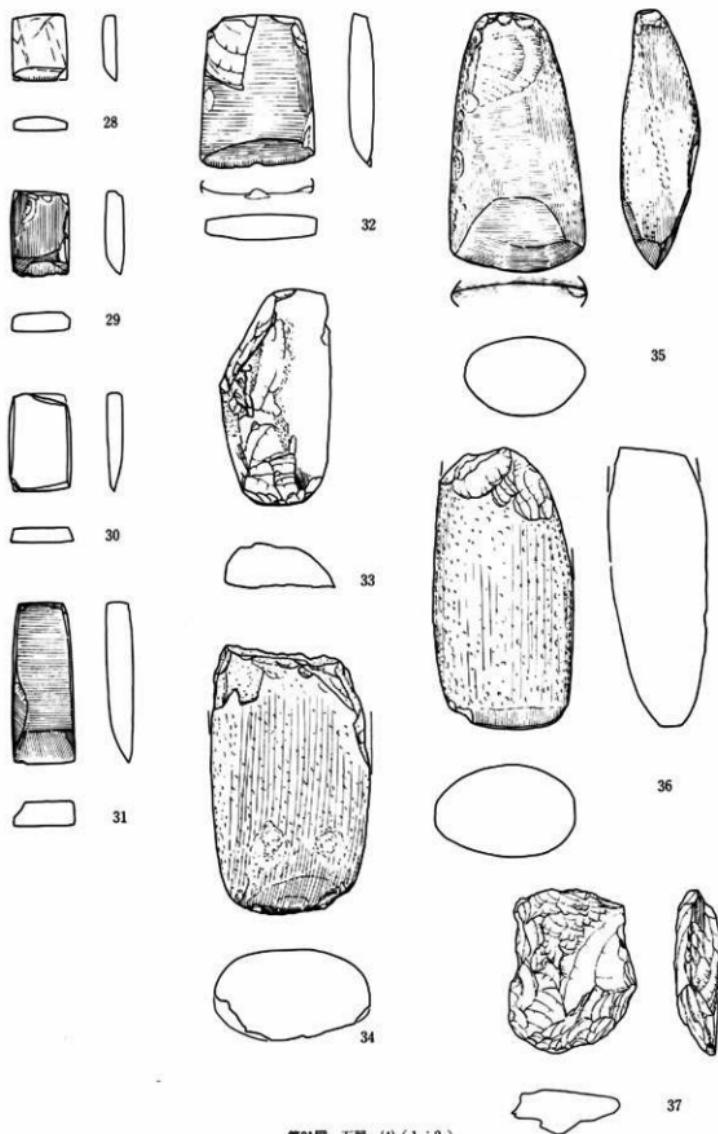
第90図 石器 (3) (2 : 3)

35もこれで本来完形品というわけではなく、おそらく再調整が加えられて再生されたものであろう。34・36は刃部が潰れており、折損後叩き石に転用されている。

(図版41)の38・39は伐採斧再生の一過程を示すものであろう。同40・41はクサビ状石器に転用されたものか。

42は叩き石に転用されている。

その他 (図版42・43) 43~47は刃部をもつ不定形の石器である。いずれも河原石から剥ぎ取られた表皮を残す大形剥片を使用している。45~47は刃部に細かい剥離が集中してツブレている。45はツブレが小さな面を形成している。



第91図 石器 (4) (1 : 2)

木器

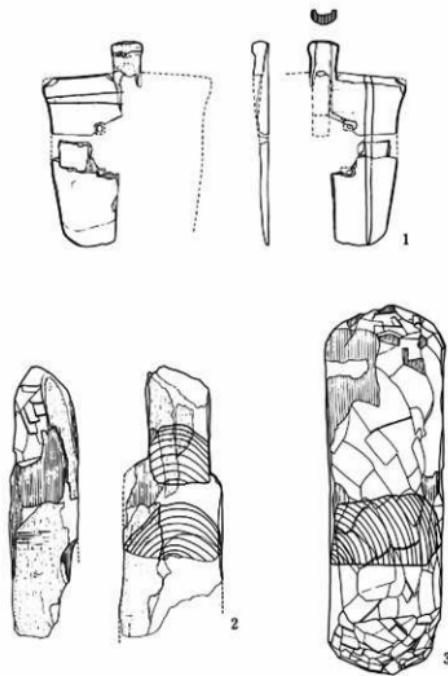
すべて SD04からの出土である。

1はスコップ状着柄スキの身部である。残存長25cm、幅12cm、長さ4cmの着柄軸から身部にかけて斜めに幅2.1cmの溝が穿たれている。身部の残存部中央には2ヶの1cm角の方形小孔が4cmの間隔で穿たれており、これが左右一対で柄の繋縫用であるとすれば、おそらく身の三分の二まで柄のがびて、身に穿たれた孔に先端をはめ込むようになっていたものと考える。カシ。

2は建築材の組み合わせの部分であろう。樹皮が残存している。

3は原材である。

このほかミカン割状の原材や木端が出土している。

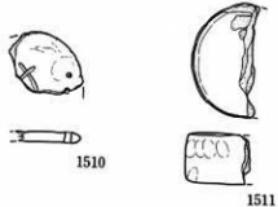


第92図 木器 (1 : 6)

土製品

1510はX状の紋様が一部認められる有孔土製品である。孔は2つ有るので、蓋かもしれない。

1511は経8cmを測る盤状土製品。二次火熱を受けている。



第93図 土 製 品

